



点字通信 第15号

群馬県立盲学校 点字係
令和6年11月25日発行

11月1日点字の日（校内放送より） ～点字による読書環境の移り変わりをたどって～

今日、11月1日は、何の日かご存じですか？今日、11月1日は、我が国の点字が誕生した日です。1890年のことでした。今年で、日本の点字は134歳ということになりますね。

今年も、少しの時間、点字についてお話させていただきたいと思います。

私（話者）が点字の学習をスタートして、今年で40年になります。この間に、点字の世界も大きく変化しました。今日は、そのあたりのお話です。

私が点字を習い始めた当時の日本では、パソコンによる点訳はまだまだ行われていませんでした。点字盤や懐中定規、カニタイプ（ライトブレーラー）をはじめとした点字タイプライターを用いた点訳が点字本作成の中心でした。もうお気づきですね。パソコンによらない点訳。つまり、印刷することができません。本が完成したとしても、何人か同じ本を読みたい人がいた場合、順番待ちをせざるを得ませんでした。

本の完成にも非常に多くの時間を必要としました。点字の書き間違いや分かち書きなどの修正に多くの手間を要したため、点訳を依頼してから手元に届くまでに短くて半年、長いと1年を超えることが当たり前前の状態でした。

また、点訳されているジャンルも限られており、参考書以外には、有名な小説が何冊か点字になっている程度でした。読みたい本を読むのではなく、点字になっている本を読む、そんな時代が長く続きました。

学習面で大変だったことの一つに、辞書を引くことがあります。私が中学生だった頃の日本には、全100巻の英和辞典が全国の盲学校にありました。しかし、これだけの冊数の中から調べたい単語を見つけ出すことには多くの時間がかかり、心が折れそうになることが何度となくありました。

時は流れ、現在ではパソコンによる点訳が当たり前となりました。全国のどこかで作られた点訳データを、コピーしたり、ダウンロードしたりして、読みたい時に読むことがで

きるようになりました。

点訳に要する時間も短縮され、早いと2週間から1か月、長くても3か月で完成できるようになりました。また、ブレイルメモやブレイルセンスなどの携帯型点字ディスプレイの普及により、点訳本や辞書を持ち運び、好きな場所で読書を楽しむことができるようになりました。

40年前の私が現在の盲学校を見学したとしたら、あまりの違いに驚きすぎて気絶してしまいそうなくらいです。

読みたい時に読みたい本を、読みたい場所で読むことができる。これは本当にすばらしいことです。点字に限らず、墨字、音声、一人一人に合った方法で読書を楽しんでいただけたら嬉しいです。

10月27日(日)～11月9日(土)は読書週間でした。係のお勧めの本を紹介します。

『盲学校でマジックショーを』 万博著 オンデマンド (ペーパーバック)

「そんなことできるの?」と思ったあなた!まずは1ページ読んでみてください。

『手で見ると世界は』 櫻崎 茜著 くもん出版

視覚支援学校に通う祐と双葉の物語ですが、実際にニュースになったことや、視覚支援学校に通う中学生のリアルな日常や心情が書き込まれています。共に生きる社会の実現のために何ができるかを考えるきっかけになります。

『わたしの eyePhone』 三宮 麻由子著 早川書房

シーンレスのエッセイスト三宮麻由子さんの最新刊です。小さな相棒スマホとの新しい発見の日々が綴られています。暮らしは小さな選択の連続で、自由に選べるのが自信につながり、心のあり方も変わります。

『夕暮れに夜明けの歌を』 奈倉有里著 イースト・プレス

この本で初めて奈倉有里さんという方を知ったのですが、なんて素敵な人なんだろう、と大好きになってしまいました。奈倉有里さんは『同志少女よ、敵を撃て』の逢坂冬馬さんのお姉さんだそうです。

『風が吹いたり、花が散ったり』 朝倉宏景 講談社文庫

フリーターの亮磨と視覚障害のある女の子さちがひよんなことから出会い、ブラインドマラソンに挑戦するお話です。今の自分を変えたい人、一歩踏み出す勇気がほしい人にオススメです。

『〈できること〉のを見つけ方 全盲女子大生が手に入れた大切なもの』

石田由香理・西村幹子著 岩波ジュニア新書

全盲の女子大生が、日々悩みながらもたくさんの壁を越え、自分の可能性を広げていく姿が書かれています。障害の有無に関係なく、誰もが生きやすい社会のありかたについて考えさせられる1冊です。

『ブレイブストーリー』 宮部みゆき著 角川文庫

ミヒャエル・エンデの『果てしない物語』と同じく、自分では変えようのない現実から異世界に行き、心の成長を遂げて戻ってくる物語です。周りは変えることは難しいけれど、自分が変わって現実と向き合っていく力をつけることができるという部分がとても好きです。小学校高学年から中学生くらいにおすすめしたいのですが、とても長い物語なので、相当の読書好きでないと読み切れないかもしれません。

『まあ空気でも吸って』 海老原ひろみ著 現代書館

海老原さんは、麻痺などの障害がありながら、一般の小学校から大学まで出られた方です。この方の物事の考え方や言葉が非常に素敵で前向きな気持ちにさせてくれます。その一つが、『ただの木でしかない屋久杉を見にいった行って勇気をもらったり、ただ地形が盛り上がっただけの富士山が見えた時にすがすがしい気持ちになってリフレッシュしたり、そのものに価値を見出しているのは人の心。木や土に価値を見出せる人間が、ただ生きているだけの人間に価値を見出せないのは怠慢でしかない。』です。

